

アンソニー・トロロープ作

桜井則子訳

## 自 伝

An Autobiography, by Anthony Trollope, Translated by Noriko Sakurai

### 第二章 母

トロロープ家全員の生い立ちにページを費やすつもりはないが、母については少し話させてもらいたい。一つには当時の文学界でかなりの名を成した母親のことを、その子供として語らないわけにはいかないからだ。また一つには、母の人生にはじゅうぶん注目に値するものがあるためだ。母の父親、ウイリアム・ミルトン牧師は、ヘックフィールドの教区牧師だった。そして、父と同様ニューカレッジのフェローでもあった。母は三十歳になる直前の一八〇九年に父と結婚した。

六〇七年前のことだが、母から父に宛てた一束のラブレターが不思議な経緯で私の元に届けられた。まったく知らない人物の家で見つかり、親切にもその方が送ってくれたのだ。その時すでに手紙が書かれてからおよそ六十年の歳月が流れていたが、結婚前後の一年ぐらいいの間に書かれたものだ。イギリスの書簡文学の元祖であるサムエル・リチャードソンや、日記や手紙でも有名なフランシス・バーニーの作品の中でさえ、こんなにも快く、優雅で、見事な表現力を備えた手紙を読んだことはない。

だが何よりも、今日のラブレターには見られない絶妙さをもし出している所に、感嘆させられる。どれも、ただ正方形の紙に書かれ、折りたたまれ、封印され、父に宛てられているが、その中に使われている言葉は、ロマンチックに傾きがちではあるが、厳しい批判の目を通して、実に見事に選ばれ、変えようがないほどぴたりと当てはまっている。

恋人に手紙で気持ちを綴ったり、言葉遣いの見事さで相手を魅了したりできる文章力を持つ若い娘が今時いるのだろうか？母は流行りの言葉を好み、目先の変わった言葉を使いこなす喜びを満喫している。その文章からはまた、心地好さをいさなう詩的なものを感じ取れる。残念ながら人生の春といえる時期でさえ、今の若いご婦人に詩を好む心をもたらずのは難しいようだ。母は散文家であり、また風刺を大いに好んだが、詩的な心を生涯持ち続けた。

結婚後の十年で六人の子供に恵まれたが、そのうちの四人をそれぞれ違う年齢で肺病

のために失った。すぐ下の妹は結婚し、子供ももうけ、そのうちの一人は今も元気だが、妹自身は母の生存中に順番に亡くなった四人の中の一人となってしまった。母に残されたのはトムと私だけだったが、我々三人の前途にはこれまで一つの家族が生み出した作品の数ということでは、おそらくどの家にも負けない冊数の本を書き上げる運命が待っていた。結婚した妹も「チョラートン」(Chollerton)という高教会を舞台にした作品を匿名で一冊書き残し、貢献している。(フランスで十五〜十六世紀に活躍した卓越した印刷・出版業者であるエステインヌ一族は、総勢で少なくとも九〜十名おり、おそらくどの一家より多くの文学作品を世に出したと思われるが、彼らは本の編集をし、多くの作品を翻訳出版しているものの、一般的観点からは作家ではない)

結婚した日から母がアメリカに旅立った一八二七年にかけて、父はずっと没落の道をたどっていた。母は社会への関心が強く、自由主義者のように振る舞い、国王暗殺未遂や、自国を愛する亡命者たちの貧さに憤慨し、そこから生じた圧制者たちへの感情的な嫌悪をはばかりなく公言していた。倒したいと思っていたオーストリア大公に逆に追跡され、着替えのシャツ一枚だけを手に逃れてきたイタリヤの侯爵や、自由のために自らを捧げるという夢想にふけるフランスのプロレタリアなどを、いつでも喜んで家に迎えさせながらもてなしていた。後年には、外国の公爵夫人の親切に感激して、熱心なトリー(保守主義)党員になり、オーストリア皇女たちにも好感を抱いていた。母にしてみれば政治とは常に心の問題であり、実際自分の信念がすべてだった。その動機をはたから見ると、母は根本的には何も理解していなかったように思う。ただ心根はあらゆる点で非のうちどころがなく、周りの人間に良くしたいという気持ちは一貫しており、犠牲的精神に満ちていたから、理屈に合わなくても母は大方正しかった。だが、感情に支配されていたことは否めない。

母の読んでいた本を思い起こすと、それらを通して母という人物が見えてくる。母が最も愛した詩人はダンテとスペンサーだった。しかし、当時の女性達の話題をさらった詩人たちについても熱心に語っていたし、バイロン卿の人気を喜び、彼への糾弾に涙を流していた。当時まだ作者として名が明かされていなかった、ウォルター・スコットの小説が出版されると、むさぼるように読みふけた熱心な読者の一人であり、アイルランドの作家マライア・エッジワースの功績をまだ話題にできる一人だった。文学は当時のもの、詩は過去のものに親しんでいたが、そのほかの書物についてはあまり詳しくなかったと思う。

父の問題と自分自身の強い願望からアメリカに行くことになるまでの母の生活は、後半金銭問題が暗い影を落としたものの、気楽で贅沢でのんびりとしていたようだ。私が憶えているところでは、ジェームズ・マサイアス、ヘンリー・ミルトン、レティティア・エリザベス・ランドンといった文学界の親しい友人がいたが、人生のかなり後半まで出版を目的として文章を書いたことは一行たりともなかった。

一八二七年に母がアメリカに向かった理由の一つは、私の記憶にも鮮明な、あのライ

ト女史の社会・共産主義的考えに触発されたためだ。ライト女史はアメリカで大衆相手に講演を行った最初の女性だったと思う。だが一番の目的は兄ヘンリーの身を立てることであり、たぶんこれらの理由の他に、世間に破産を認めるはめになる前にイギリスを離れたかったのだろう。オハイオ州のシンシナティで雑貨店を開いたが、この投機につき込んだ金はすべて失ったのだと思う。大金ではなかったはずだし、他にも同じように損をした人たちがいたに違いない。

しかし母は、アメリカのいとこたちの所に滞在しながら自分の周囲をよく観察していた。そして、それを本にしようと思ったのだ。原稿を一八三一年に持ち帰り、一八三二年の初めに出版したが、この時すでに五十歳だった。もしうまく収入を得られなければ、我が家は無一文だと意識しながらの執筆だった。それまで一シリングたりとも自分の手で稼いだことのなかった母が、ほとんど即金でかなりの金額を出版社から受け取った。私の記憶が正しければ数ヶ月内に四百ポンドを二回手にした。そしてこの時から亡くなる少し前まで、少なくとも二十年を超える期間、執筆でかなりの収入を得ていた母だが、作家業の船出としては相当に遅い年齢だった。

「アメリカにおけるアメリカ人のマナー」(The Domestic Manners of the Americans) は一連の旅記の第一作だが、おそらく一番の傑作であり、間違いなく最も知名度の高い本である。当時のアメリカ人のマナーに大きな影響を与えたといっても過言ではなく、その影響は彼ら自身からも高く評価されている。しかし、アメリカの若者の将来の見通しや、幸福を予想するのに、母ほど不適格な観察者はいなかったし、まして、一国が繁栄の途にあるか否かなどを判断するのに、母ほど不向きな人間はいなかっただろう。ほとんどの女性がそつであるように、目にしたものを主観的に判断したのだ。母にとって不愉快なものは、他人にとっても当然不愉快であり、それは良くないものに決まっている。たとえ食べ物や着る物に恵まれていても、テーブルに足を乗せたり、目上の人を敬わなかったりしたらどうなのか？アメリカ人たちは母の眼には粗野で、野暮ったく、品がなく映り、彼らに向かってそのままを伝えていた。客間の話題としてはなかなか粹な、社会・共産主義的内容は口々に伝わっていた。母の本はかなり辛辣ではあったが、非常に巧く書けており、なにはともあれ家族を破滅から救ったのだ。

まず、小説が二冊、そしてベルギーと西ドイツについて書いたものという風に、次から次へと本が出版されていった。「オルレイファーム」という名で呼んできた、以前暮らしていた家に引越し、まずまずの生活環境を家族に取り戻してくれた。

陽気と勤勉が交じり合って出来た母の性格は、どちらもこれ以上ないくらい底抜けだった。勤勉については、内にとどめられ、同じ屋根の下に住んでいる人間でも知る必要はなかった。朝四時には机に向かい世の中が目覚めはじめる前に一仕事終えていた。一方、陽気さは外に向かい、人に尽くすことで満たされた。母は他人の足でダンスのステップを踏み、他人の舌で食事や酒を味わい、他人の美しい装いを誇らしく思うことが

できた。自分の娘にはどの母親もそつするだろうが、母はその様子や声やマナーが気に入った娘さんになったら、分けへだてはなかった。執筆の最中でさえ愛する者たちの笑い声を聞くと楽しそうだった。浪費家であり、そのための金は幾らあっても良かったが、仕事の重圧は時として非常に母を苦しめた。だが、だれよりも陽気で、ともかく、生活を楽しむ達人だった。

ハローでの新たな生活は二年近く続き、その間私はまだ学校に通っていた。やがて、とんでもない事態が起こり、その暮らしが終わったときには、十九歳になろうとしていた。父は体調が良い日は、修道士や修道女についての辞典作りをするだけの虚しい日々を過ごしていたが、馬一頭と二輪馬車は手放さずにいた。学校に夏まで残るはずだったのが変更になり、すぐにも卒業することが決まった、一八三四年三月のある朝、かなり早い時間に呼び起こされ、父をロンドンまで馬車で送ることになった。父はずっと病気で寝込んでいて、そのときも人に手綱を任せたくらいだから、かなり具合が悪かったに違いない。馬車が動き出してからやっと、ベルギーのオステンド行き船に乗るんだ、と行き先を告げられ、命じられたとおり町を抜けて船着場まで馬車を走らせた。若いときから口数の少ない人だったが、このときもなぜオステンドに行くのか、最後まで話してくれなかった。海外に引越すような話を耳にしたことはあったが、なぜ父だけが先に、しかもこんなに急に出発するのか、家に戻るまでは見当も付かなかった。戻ってみて分かったのだが、家も家具もすべて州の役人に差し押さえられていた。

馬車で家の近くまで来ると、以前家で働いていた作男に呼び止められ、ここから数ヤード先に行けば、馬も、馬車も、馬具も全部没収される、と身振り手振りを交え、声をひそめて、私が事態を呑み込めるように教えてくれた。後から考えるとどうでもよいことだったが、私は素早く行動し、まんまと役人を出し抜いた。だが、この小細工は家のために何の役にも立たなかったのだ。馬車で村まで行き、そのまますべてを金物屋の言い値の十七ポンドで売り渡した。作男は相当な財産を急場から救ったと思いきや、こんでいたように、とても褒めてくれたが、いかにも抜け目のない私の行動で得をしたのは、金物屋だけだったろう。

家に戻ると、とんでもない状態になっていたが、そんな中でも愉快なことがあった。母は苦心惨憺して、価値はともかく自分にとつても大切な品々を何とか手元に残そうとした。今のよつに家の装飾に贅を尽くす時代ではなかったのだから、残ったものはいくつかの陶磁器やガラス食器、数冊の本、そしてわずかばかりの銀食器などだ。そういった物をそつと持ち出し、庭の隙間から友人のグラント大佐の敷地へと運び込んだ。当時十六歳と、十七歳だった妹たちと、それよりほんの少し年下だったグラント大佐の娘たちが中心になって持ち出しを実行した。私も喜んでどんな企てにも協力した。不信感を募らせる役人たちの目を盗み、事を荒立てずに、出来る限り債権者たちを出し抜いた。このとき持ち出した本の何冊かは今も手元に残っている。

家族全員が数日間大佐の家に厄介になり、この上なく親切な大佐夫人の世話を受け、

励まされ、手厚くもてなされた。それから父の後を追ってベルギーに行き、プリュージユの町を囲む城壁のすぐ外に建つ大きな家に身を落ち着けた。このときから父が亡くなるまで、すべてが母の稼いだ金で賄われた。母は再び引越先の家具を揃えることになったが、二年半前にアメリカから帰って来てから、これが三度目の引越しだった。

家族六人が今回の新たな国外脱出に加わった。兄ヘンリーは、体を壊しており、ケンブリッジ大学も中退していた。下の妹も体調がすぐれなかった。だれもまだそれを口にしなかったが、あの肺病という陰湿な悪魔が一家にはびこっているのはたしかだった。父は失意のどん底にありその上寝込みがちだったが、机に向かうことができるときにはまだ教会辞典の編纂を続けていた。私と上の妹は健康だったが、私は怠け者で役立たずの居候であり、救いようのないぐうたら人間で、どついた仕事、専門職、商売に進むのか、何の考えもない十九才の青二才だった。その上、プリュージユの町のかわいい女の子たちと恋に落ちているような気でしたし、学校でのたまらない惨めさから開放されたので、かなり幸せな気分だったのを憶えている。だが自分の将来に関しては志のかけらもなかった。

家族のためにあんなに身を粉にしてつくさねばならなかった母は、さぞ辛かっただろうという思いが折に触れ湧き上がってくる。他の家族が何もしていない中、母は働き続けるしかなかったが、その働きぶりはとも五十五歳の老婦人とは思えなかった。母が五十を越えているのに気づけば、家族はもっと母の苦勞を思いやっていただろう。

そして、徐々に悲しみが我が家に忍び込み、居すわるようになった。兄の病は重く、その後の数年間家族を怯えさせた、もっとも忌まわしい病名が宣告された。すでに、初期の治療可能な病状ではなかった。肺病だ！それがプリュージユの医者診断であり、だれもがそれを疑わなかった。このときから、病人の世話をしている母を目にする時間が多くなった。家の中には二人の病人があり、母自身が看護を尽くしていた。小説の執筆ももちろん続けていた。定期的に本が出版されるのは当たり前になっていたし、実際次々に出版された。医者から出された薬の小瓶とインク壺は、母の部屋で対等の位置を占めるようになっていた。

私はさまざまな状況の下で多くの小説を書いてきたが、このときの母のように死の床に就く息子に心が奪われているときに、執筆できるかどうかは大いに疑問である。自身を二分する意志の力、そして知力をそのままに保ち、さまざまな問題と切り離し、成さなければならぬ仕事に集中するという点で、母以上の人物がいただろうか。小説を書くことがあらゆる仕事の中でもっとも難しいとは思わないが、おそらく心の平静がかなり求められる職業であるといえる。サー・ウォルター・スコットは、印刷業者から被った借金の返済に追われながら執筆を続け、命を縮めたといわれている。母は持ち前の強さで無事にやり通した。昼夜を問わず家族の看護に尽くしながらだ。なにしろ間もなく三人が死の床に就くのだから。

この頃、私にオーストリア軍の騎兵将校にならないかという話が舞い込んできた。兵

士になるのがどうやら私の運命らしかった。だが、そのためにはまずドイツ語とフランス語を学ばなければなかったが、どちらの言葉もほとんど知識がなかった。一年間の猶予が与えられたが、自費で達成しなければならなかったため、ブリュッセルでウイリアム・ドルリーが開いていた学校の古典語補助教員の職を引き受けた。

ドルリー氏は私が七歳でハロー校に通い始めた頃に教わった教師の一人であったが、五十三年の時を経た今も当地で牧師として活躍しておられる(この自伝が書かれた二年後の一八七八年没)。ブリュッセルでは、三十人の少年の教育を私に信頼して任ず人間が誰もいなかったのを思い起こすと今でも心が沈む。

子供たちはフランス語を学びに来たのであって、父兄の方々が古典語の習得にこだわらなかつたことを願うのみである。生徒全員の散歩の付き添いを二度やらされたが、二度目の散歩から戻った子供たちの服を見たドルリー夫人は、もうとうてい私には任せられないと宣言した。古典語以外の授業を受け持った記憶はない。だが、この職に就いていたのはほんの六週間であり、おそらくまだ失敗した授業のやり直しも手掛けていなかったらう。

六週目がちょうど終わる頃に、郵政省の事務職に採用したいという申し出の手紙が届き、それを受けることにした。母が親しくしてもらっていた友人の一人に当時郵政省の大臣だったサー・フランシス・フリーリングの子息、クレイトン・フリーリングの夫人がいた。私の困った事情を知った彼女は、義父に郵政省で雇ってみてはもらえないかと頼んでくれたのだ。

ロンドンに向かう途中、急いでブリュージュに立ち寄ったが、病人がまた増えていた。未っ子のエミリーは私が家を離れたときには体調がいまひとつはつきりせず、虚弱体質であると診断されていたが、それは、真実を覆い隠し、絶望に落ち込まないように偽りの希望を与えていただけだった。単なる虚弱体質のはずなのに、今や病の床についており、もちろん、回復の見込みはなかった。だれもけっしてそれを口にしなかったが、兄、妹ともに望みがないことはわかっていた。父もかなり深刻な病状で、私は知らなかったのだが、すでに助からない状態だった。

病人たちに囲まれての暮らしは長女の健康をも害す恐れがあると考えた母は、彼女をイギリスに戻すことに決めた。一八三四年の春にブリュージュに移り住み、全てが同じ年の秋も深まつた頃に次々と起こつたのだった。そして、ベルギー人の女中二人と共に、母だけが町外れの大きな家に残った。死期の近づいた夫と子供たちを看取るために、そして家族の生活を支える小説を書くために……この時期に母はもっとも優れた作品を生み出している。

私自身の郵政省就職については次の章で語ることにしよう。クリスマス目前に兄が息を引き取つたため、ブリュージュの墓に埋葬した。続く二月に父も亡くなり兄の隣に葬つた。そして父の死と共にあのうんざりする辞典も目の目を見ることはなくなつたが、父の晩年がそれによっておおいに慰められたのを願うばかりである。

時折当時を振り返り、時の経つのも忘れて、父の不運に思いをめぐらすことがある。高い教育を受け、人生の大部分は能力に満ち、並外れた頑強な体に恵まれていた。悪習に溺れることもなく、何一つ気晴らしもせず、生まれつき愛情深く、子供たちの幸福を心から願ひ、生家も裕福だった。世に出たときにはすべてに恵まれていると思われていただろう。だが、何一つうまくいかなかった。父の手が触れると失敗を呼び込むかのようだった。次から次へと見込みのない事業に手を出し、その度にそのとき自由になった金のすべてをつぎ込んでいた。だが、なんといても生涯の不幸の元凶は、父が愛情を注いだ子供たちの我々でさえ耐え難かった、あの恐ろしい癩癩だった。家族全員が父と距離を置いていたが、それでも家族のためなら自分の命さえ惜しまない人だったと思う。私の知る父の人生は長い悲劇だった。

父の死後、母はイギリスに戻り、バーネット近くのハドリーに小さな家を借りた。私はその頃ロンドンの郵政省で事務員をしていたが、母が催すちよつとした夕食会やダンス、ピクニックで家がとてにぎわっていたのをよく憶えている。その一方で母は毎朝人々が起き出すよりもずつと早くから机に向かっていた。だが、ハドリーに住んでいたのはほんの一年ちよつとだった。ロンドンに家を借りて移り住み、そこで残されたもう一人の妹が結婚しカンバーランドに引越して行った。間もなく母もその地に移ったが、今度は家を借りるだけでは納まらなかった。町の近くに一万二千平米ほどの土地を買って家を建てたのだ。

一八四一年だったと思うが、この十年間で六回も引越しを重ねてきた。しかし、カンバーランドの氣候があまりに厳しかったため、一八四四年にはイタリアのフィレンツェに移り一八六三年に亡くなるまでその地で暮らした。七十六歳まで執筆を続け、全部で百十四冊の本を引退するまでに書き上げたが、処女作を執筆したのは五十歳だった。年を取ってからでも、何かを始めたいという気持ちを持つ人たちにとって、母の人生は大きな励みになると思う。

母は無欲で愛情深く実に勤勉な女性であり、生活を大いに楽しみ、すぐれた健康に恵まれていた。また、天性の豊かな創作力とあふれるユーモアがあり、心からのロマンチストだった。しかし物事を明確に捉えるという点で難があり、道徳や礼儀作法だけでなく事実を書くときさえ、つい大げさな表現になりがちだった。

( つづく )